

## 「モルドバドキュメンタリー2011」第6号

発行日 2011年4月4日

発行人 モルドバ復興支援協会 事務局長 沓澤正明

住所 〒651-1132 兵庫県神戸市北区南五葉3-2-35

電話 078-594-2785 Email molkorjp@ybb.ne.jp

2011年8月27日はモルドバ共和国独立20周年記念日。



世界中のカエル 絵：侷霞

カザネスティ子供デイケアセンターの所在する学校のグラウンドに草がぼうぼう生えている。そこに、世界中のカエルが集まったらおもしろいな。モルドバはまだまだ貧しい。紙がない、色鉛筆がない。絵を描きたい。この絵を見てモルドバの子供たちはきっとケラケラ笑ってくれるだろう。

### モルドバ滞在記

報告者 京都薬科大学 新6回生 沓澤永治

今般、母沓澤美喜の第28回モルドバ訪問に同行した。人物の名前は基本的に実名だが、個人の属性は個人情報保護のため書かない。2011年3月24日出国～4月2日帰国

3月25日はれ

イスタンブール空港に朝6時到着。時差ボケはあまりしていない。空港でランチをたくさん頼みすぎたり、日本で買ったお茶「伊衛門」をモルドバに行く前の検査で捨てられたり、面白い話はたくさんある。

イスタンブールからモルドバへ。18時にキシノウ空港に到着。ライサさん、ウラジーミル君、サワさん、ピンザルさんの4人が迎えてくれた。飛行機から見たのはモルドバ

の広大で自然あふれる緑と夕日のコラボレーションだった。「黒い大地」と呼ばれる田畑の種植え前の姿をよく見ることができた。

泊まる家はライサさんの夫の弟の家である。家には奥さんのタチアナさんと息子のヴィクトル君が住んでいる。ご主人は先月インフルエンザで亡くなった。生前ご主人はいろいろな事業を一緒にやろうとミキと何度も話していたが、うまくは行っていなかった。

この家までタクシーを使った。道路は整備されておらずでこぼこだった。センターラインがないことに驚いた。電灯も少ない。食べ物とはとにかく毎日チーズが出るらしい。ブルーチーズのにおいにはまだ慣れない。ブルーチーズのケーキも我慢して食べたが、体がもつか心配である。トイレも紙を流していいのかわからない。

言葉が適当なのに通じるのは長年活動しているから成せる業か？とっさにも英語がでるミキはトルコ人にも通じていたのでグローバルな人間だと感じた。

ウラジーミル君は32歳で今度4月7日に日本へ就職試験の面接に行く。3回目の来日予定である。日本で語学院に通って勉強していたので日本語はペラペラであり通訳をしてくれて大助かりだ。地震や放射能で日本は大変なのに日本に行くのかとミキは心配していたが、彼は大丈夫と言った。日本が大変なときでも日本に行こうという気持ちが強いのは多くの苦勞をしてきたからだろうし、また日本が良い国であると感じたからなのだろう。そんな彼をミキは褒めた。

明日はミーハイ君に会うらしい。

3月26日はれ

今日はクンス夫人に会った。長女オリビア、次女のハナちゃんもいた。クンス夫人はポルトガル人。後からミーハイ君もきた。ミーハイ君は結婚していて今年2月8日にお子さんが生まれた。2月8日はミキの結婚記念日だ。すごい偶然だ。

ミキは通訳なしでいつも通りの日本語の単語を英語に置き換えるだけで会話していた。不思議と日本語でしゃべるよりも通じているように感じる。ミキの気持ちは日本にいる時もモルドバにいる時も同じなのがすごいと思った。グローバルな意識で常に生活しているのだと感じた。むしろミキは日本よりモルドバにいる時のほうが元気だ。

モルドバの街は住むところばかりで他は何もない。皆出稼ぎに行っている証拠だ。国が発展しないのは政府が悪いのだとい

う。街には犬や猫が放浪している。

明日は容子さんに会う。

3月27日吹雪

今日は一日長かった。ライサさんの家で昼食をとり、容子さんを待った。容子さんが来ると話はヒートアップした。午前中はニックさんの話を聞いた。話の最後に自己紹介で私は緊張しながら私の母を「She is great mother in Moldova!」と紹介した。ミキはいろいろ知り合いがいるらしい。エレナさんに会った。夫のグズンさんも一緒だ。とても情熱的な活動家で元女優。挨拶のキスもすごい。とてもオープンな女性だ。人が経験したことのないような経験を話してくれた。文章にはどうも表現できない。ミキはどうやってエレナさんに最初出会ったのかを忘れたらしい。与えて忘れるとはこのことだ。グズンさんは大学で教えるほど著名な画家で侷霞先生の「はばたく」という絵を絶賛した。

日本人と結婚しているモルドバ女性に会った。彼女はドコモのコールセンターに勤めており、今ちょっと戻ってきているようだ。あとでメールが来るだろう。

エレナご夫妻にライサさんの家まで送ってもらった。ライサさんの家庭はライサさん、夫、ライサさんの母、ライサさんの息子ジーマさんとその妻、その子供二人。四世代三家庭の大家族だ。近くの団地の一室に住んでいる。大統領首席補佐官を歴任した有能で社会的地位の高い彼女がここに住んでいるのは野心のない純粋な心がある証拠だ。おばあさんも寝たきりであるが、ひ孫が騒いでいる声を聞いて日々幸せそうだ。理想的な家庭とはこのことだと思った。

歯科医師であるジーマさんは薬学生である私に興味があったようだ。静かで無口で無表情でちょっと怖い印象。でも何か仲良くしたいような感じだった。コミュニケーションがうまくいかず残念だった。容子さんがくると、話は日本の文化についてミキと容子さんがジーマさんに話していた。ミキは日本の男性が馬鹿にされないように擁護したり、またモルドバの人たちを褒めたり、日本での大地震のことも話していた。

夜は西川さんの家に行った。西川さんはルーマニアで仕事をしていた時モルドバ女性歌手と結婚してモルドバで暮らすようになった。

ミキがテレビに出ることになった。ミキはテレビ出演は嫌っていたが、モルドバで集められた日本の大地震の義援金に謝意を表してと言うことではどうかということだった。東京の会員根田さんが岩手県出身であることから、根田さんのためにテレビに出ようと決意した。(しかし、取材の日ミキはキシナウにはいなかった。)

夜は容子さんと話した。容子さんはルーマニアで大学生に日本語を教えている。はじめは純粋な気持ちだった彼女は、ルーマニア人にいじめられて、今はちょっと暗い。そんな彼女はミキと話をしたかった。ミキもいろいろ人を疑う人間だ。馬鹿みたいに明るく振舞うが、暗いモルドバ人を明るくさせようとしているらしい。もちろんほとんど自然にしているところが天性だと思う。ミキの真心はすごいと思った。

3月28日あめ

今日はカザネスティ村に入った。キシナウから車で2時間行ったところにある村だ。道路は整備がされていないところもあり、雨でぐちょぐちょだ。かつてないほど靴に泥がついた。ここで一泊するのはいろいろ覚悟が必要だった。ライサさんの叔父の家に泊まった。叔父さんは5年前に死んでいる。ベッドは6個もあり、とても広い。外にはニワトリ、アヒル、ブタ、イヌなどの家畜がいて、その奥には畑とトイレがある。トイレは畑にあり大変だ。

家に着くとお昼のプラチンタを食べた。水道がないので水は貴重だ。何か水が変な味、電解質が多い水の味がした。昼食後すぐカザネスティ子供デイケアセンターへ行った。センターは小学校の教室一室と遊戯室、食堂を放課後に借用している。校長に挨拶した。日本の大地震の犠牲者のご冥福をお祈りしたあと蜂蜜をくれた。日本の大地震の話をしたあと食堂で軽くご馳走をいただいた。

その後は教室へ行き、子供たちから歓迎を受けた。子供たちは心を込めてたくさんものを見せてくれた。日本語で日本の地理について、カナの発音や日本語の挨拶、簡単な日本の言葉などを披露してくれた。ロシアの民話「大きなかぶ」を日本語で読んでくれた。自分の名前をひらがなで黒板に書いたりもした。ミキが最後に「大きなかぶ」の読み聞かせをした。母親が絵本を子供に読んであげるような心を伝えようとしたのである。ここの子供たちは親が出稼ぎに行ったり、病気だったりしている。

しきりにケータイカメラで私を撮ろうとしている女の子がいた。日本からイケメンが来たので一緒に写真を撮りたいらしい。年長さんだが、親は出稼ぎにいつて戻ってこない。シャイで可愛らしい。子供たちはトラブルばかりだ。容子さんは子供たちだけは純粋だから守りたいと言った。

夜は焚き火で暖炉に火をおこしていた。ここは家を管理している人がいる。離婚した女の人で子供が三人いる。この女の人と子供たちに家と畑を管理させて、代償として家を貸してあげているようだ。そこの少年ミーシャ君(5歳くらい)が暖炉にとうもろこしの残り芯をたくさん入れて火をおこしてくれた。暖を取るのもここでは大変だ。

夜は容子さんと話した。ミキは風邪気味で少し休んでいた。容子さんはルーマニアでいじめられて心がキズついている。容子さんが知っているルーマニア人は良い人だと思っていたのに1年たつと良い人でなくなり容子さんはどうしたらよいかわからなくなってしまったようだ。

純粋な心がなくなってしまうようで虚しい感じ、もうルーマニアの留学をやめようかと言っていた。でも、続けたい気持ちもまだあるようだ。今はちょっとストレスで疲れてるの、と言っていた。今一番しんどいときなのかもしれないのがんばって乗り越えてほしいと思う。がんばって容子さんが本を出して、モルドバの良いところをちゃんと説明くれるといいなと思った。

3月29日はれ

今日はカザネスティ村で朝を迎えた。朝はとても寒い。ミキは少し元気になったようだ。とにかくトイレが大変で、ここの生活は1週間が限度だと聞いていたが、本当にそうだった。

さらばカザネスティ村…、もう1日いたかったが、その土地を後にした。ライサさんはこの村で育った。キシナウの街よりも、この村に戻りたいと言っていた。モルドバの良いところがこの村にはあるのかもしれない。タクシーに乗って外の景色をみた。昨日来るときは寝ていたので気づかなかったが、広大な土地がとても美しかった。「大地」とはまさしくこのことを言うのだと思った。あと何年もこの景色が維持されればここは世界遺産になるだろう…。その瞬間「良い国」だと感じた。となりのミキに「良い国だね」と言いたかったが、そのときの感動が自分の口を開かせなかった。こんなに貧しい国、こんなに自分勝手な国、こんなに不便な国、文化も誇りもない国、そんな国なのに良い所が一つあるとミキは言う…。なんとなくわかった気がした。容子さんにはぜひこの国の良いところを本に書いて

ほしい。

途中のカフェテリアで紅茶を飲んだ。トイレはきれいだ。うんこも久しぶり、水が流れにくくて焦った。紙もなかったがたまたまティッシュがあつて助かった。家畜がたくさんいたので写真を撮った。ここでミキはタクシードライバーに日本のお金をあげた。どうやらコインコレクションをしているようで、喜んでもらえたようだ。モルドバのドライバーはみな若い。モルドバの道路は車が少ない。彼は時速130キロで走っていたのでおもわずシャッターを切った。これは車好きにはたまらないスリルだろう。車の運転はしたことがないが、小林貴虎さんの気持ちがわかった。貴虎さんはモルドバ女性と結婚した後、モルドバに来て車を乗り回してスピード違反で捕まったことがある。

途中で「こうのとりの巣」を発見した。侑霞先生の絵で見たのと同じである。水滴がこぼれた絵かと思っていたが、本当にこんなものがあるのかと驚いた。

やっと家に着いた。しばらく休憩。少ししかいないのに自分も欧風になった気がしてくるのが不思議だ。元気が出てきたミキはこの時間に容子さんと話をしていた。容子さんを元気づける時間となった。

夕方はタマラさんに会いに行った。ミーハイ君も一緒である。ミキは人を活かすのが上手い。途中でケーキを買った。カザネスのときのドライバーとはちがいちょっとこわい。あまり待ってくれないので急いで買った。キシニョフから1時間くらいでついた。ぶどう畑が一面に広がっている。タマラさんに会った。10年前会ったときは怖かったが、今はとても良い顔をしている。こんなに優しい人だったかな？相変わらず大きい。タマラさんはかつて日本からの支援でトラクターを買った。農業をよくしようというのが彼女のミッションだったが、国の協力が得られないためうまくいかなく難しいようだ。タマラさんは近いうちにモルドバ女性協会「農婦の会」(ツウェレンクツァ)のリーダーを別の人に決めるらしい。タマラさんは政府から信頼を失っているのかもしれない。立場は変わってもエレーナさんと同じようにミキはタマラさんを愛するだろう。農業はタマラさん、中間層はエレーナさん、トップはライサさんに役割を任せようと考えているようだ。確かにミキはモルドバの復興活動をしている。一番難しいのはトップだろう。これが「トップ除外」だ。タマラさんとライサさんは仲が悪い。下と上の温度差が原因だが、ここを一つにすること

が一番の課題だ。

3月30日はれ

今日はキシノウの学校に行った。日本の大地震の被災者のために子供たちが義援金を集めてくれた。3000レイ(約4万円)、モルドバの平均月収の2カ月以上の金額だ。この学校は大きくて1~12年生(小中高一貫)まである。3、4年前、ミキはここに支援をしていた。そのお礼として子供たちが義援金を出してくれた。涙ぐましい現地のお金をドルに交換しないで日本に持って帰ることにした。

まず校長に挨拶した。そして子供たちが集まる教室に入った。ラジオ番組のジャーナリストがきていて、取材になった。義援金とCDと本と紅白の編み物と折り鶴をもらった。

そのあと茶話会があった。日本の大地震について細かく説明した。日本は海ばかりで逃げ道がないが、そういう意味で海の無いことは良いですねとミキは言った。ミキは常にモルドバの良いところを伝えて気づかせようとしている。モルドバの良いところをモルドバ人自身に教えたいのだと思った。

次にサワさんとピンザルさんに会うためにレストラン「ラ・プラチンタ」に行った。ピンザルさんをミキは「ユーリーママ」と呼んでいる。ユーリー君はモスクワ大学の後日本の慶応大学を卒業するとすぐに大統領府補佐官を歴任した。ミキはユーリー君が学生の時から交流してきたのである。ユーリー君はお人形さんのような女性と結婚したとミキが言っている。サワさんは先生を育てる先生で「モルドバの著名なる教育者」と敬意を表して呼ばれている。タマラさんやライサさんを教育し、また紹介してくれたのもサワさんだ。サワさんは息子もその嫁も、家の人みんなエリートでそれが誇りだ。サワさんは旧ソ連時代に両親がシベリアに抑留され、苦勞していたそうだ。子供の時に今のご主人に助けられ、大学教授になることができたらしい。ピンザルさんはサワさんのお手伝いできている。ミキは何年も前にユーリーくんから預かった8ミリカメラが見つかったと報告した。ミキはこのレストランで美味しく食べて。この国のお年寄りには食べ物に苦勞している。だからミキはこの人たちのために食べた。ミキはお年寄りに励ましたいといつも考えている。

夜は容子さんとまた話した。容子さんとは最後の夜だ。この3日間で元気になったようだ。昨日の夜はどうやらミ

キとけんかをした。今朝、容子さんからミキに謝罪の置き手紙があった。こういうところが純粋なところだと思った。ミキのことを純粋に理解したいようだ。通訳ももっと上手にしたいようで今日はよく頑張っていた。ちょっと強引な印象も受けたがミキも一生懸命やっている容子さんの姿をみて、良く思っていたようだ。だから今夜はミキのことを教えてあげた。ディスカッション、テーマは「ミキ」。良い時間だったと思う。容子さんは良い人だ。頑張してほしいと思う。

3月31日はれ

今日は容子さんを見送りにいったあと、ルチアさんに会った。直子さんも来ると言っていたが忙しくて来れなかった。ピザハウスでピザを食べた。ルチアさんはイースター前でお肉は食べてはいけないようだった。ルチアさんは「まねきねこ」という団体の代表者だ。「まねきねこ」は日本の文化をモルドバに伝える団体で、折り紙、日本料理、お茶、書道、押し花などいろいろやっている。ひな祭りや鯉のぼりのような行事もやっているようだ。いろいろな折り紙のプレゼントをもらった。とても上手にできていたので、日本の文化が好きであることがよくわかった。日本の文化をこれだけ愛してくれるのは嬉しい。

その後女性知識人たちのカンファレンスに参加するため国立図書館に行った。みんな地震のことを心配してくれた。通訳はウラジーミル君がしてくれた。仲が良い雰囲気だった。サワさんもいた。タマラさんのことを言っていた。心配しているようだ。タマラさんのことを見捨てないようにミキに言っていた。そしてみんな仲良くと言っていた。日本の地震のことを想って赤毛の女性が歌を歌ってくれた。最後はみんなで歌ってくれた。モルドバ民謡を聴いてミキは泣いた。カンファレンスが終わるとみんなミキの近くに来て、いろいろ話かけた。ミキはみんなの顔を覚えていた。女医も何人かいるようだ。すばらしいメンバーをライサさんとサワさんは集めている。

タチアナさんという学生もいた。彼女は交通事故で両親がいない。広島の下竹さんが主宰している「モルドバ復興と学生支援の会」から奨学金が賦与されている優秀な学生である。ミキは安全な方法で日本招待をしたいので安心してと彼女に話していた。彼女と私は同じ誕生日だという。何という偶然。

コンサートに招待された。モルドバ音楽だ。写真では何度か見たことがあったが、動いているのは初めて見た。まず学生たちが最初に歌ってくれた。その後にプロだ。単純だがプレストの速いリズムとゆるりとした踊り、細かいチェンバロの動きが

特徴的だ。とにかく速いがどこかのどこかで皆楽しそう。スズメがチュンチュンチュンチュン鳴いているようだ。ヴァイオリンのアップダウンが全員揃っている。モルドバの楽器パンフルートも顕在だ。みなプロで音楽界ではどこも共通してすごい腕の人はいるのだと思った。すごいはずなのにそれを自慢するように演じるわけではなく、楽しそうに演じている。そんなところが好きになった。日本に招待できるような良い人がいたらいいなとミキは言った。確かに、モルドバの良い曲を日本人に聴かせて日本に影響を与えられたら、きっとモルドバの人たちも自分の文化に誇りをもつと思う。

4月1日はれ

今日は医科薬科大学に行った。大きな病院の近くに大学があった。薬学部のキャンパスを見学した。サワさんの紹介で、健康保障省の人が案内してくれた。通訳は西川さん。大学のディレクターに挨拶した。留学生は無試験で入れるので、頭の良くない人も入ってきて困っているらしい。薬学、医学はちゃんとした教育が絶対に必要なので、試験を設けないといけなと言っていた。そしてモルドバの優秀な医学薬学生たちは皆国外に出ていってしまう。サラリーは国外のほうが良いからだ。だからモルドバは発展しにくいのだ。せつかく教育しても自分の国に戻ってこないのは悲しいことだ。なんとか自分の国を良いところと思えるような国になってほしい。医療分業はヨーロッパ発祥ということもあり分業率は100%。医療システムはまずかかりつけ医が指定されており、市民は無料で医療を受けられる。高度な医療が必要な場合は、大きな病院に行く。共産主義システムだ。北朝鮮も同じようなシステムだった覚えがある。医療はやはり皆平等のようだ。薬局も日本と同じような感じだ。

話が終わると、教室やラボをみせてもらった。何十年前かよくわからないような旧態依然たる器具や設備だった。とてもシンプルなラボで、日本の薬科大学と比較してなんだか申し訳なく思った。HPLCやIRなど基本的な分析機器はあったが、日本の薬科大学の設備の良さを身にしみて知った。ロシア語での授業風景も見せてもらった。インターネットなどで国際間での交流ができれば良いなと言っていた。そうすることがまず初めにできることだと…。国際交流の必要性を知った。帰りに大学案内と、大学のヒス

トリー、キシノウのポストカードをもらった。この国の人たちはとにかく一生懸命生きていると思った。

この国はフランスと並んでブドウが有名だ。町一つ分はある広大なブドウ畑がその証拠だ。赤ワインにはコレステロール値を下げる作用がある。だからヨーロッパ人は太っていてもコレステロール値が高くない。こういう面からもブドウの天然物化学の研究をすれば、この国の化学も発展すると思った。

午後からショッピングをした。お土産だ。100ドルをレイに替えた。ライサさんがちゃんと100ドル分のレイが確認した。そして薬局で薬を買った。記念にアスピリンを買ってもらった。日本の薬局には売ってないので、嬉しかった。アスピリンが一番古くて最も有名な医薬品だ。薬剤師は優しくかった。白衣のポケットや襟元のエメラルドグリーンのラインがおしゃれだった。買い物ではたくさん紅茶を買った。パカパカとお土産を100ドル分買った。ものすごいスピードでレジの人が裁いていた。ちょっと乱暴だったが…。

少し寝て、帰る準備をした。とうとうアンドレー君には会えなかった。アンドレー君は離婚で苦労しているらしい。しかし、元気なように呼んだらいつでもミキのお手伝いをしてくれるということだった。

しばらくして空港に向かった。車はジーマさんが運転してくれた。途中で教会によった。キャンドルを買って入口の前に供えた。中では礼拝が行われていた。女性はスカーフをかぶらないと入れない。

空港に向かっているとき、警察につかまったが特になんということもなかった。ジーマさんも特に気にしていない。よくあることなのか、日本人が乗っていたから呼び止められたのかはわからないが、モルドバ人の対応は穏やかだ。この国ではあまり騒がないほうが良いようだ。のんびりとしかし一生懸命生きている国だと思った。

ジーマご夫婦には相撲の代々の横綱の名前が書かれためおと茶碗をあげた。ジーマさんは静かな人でどこかヤスに似ている。ヤスは私の兄である。怖い人だが優しい。医師なのでどこか鼻で笑うところがある。そんなジーマさんがいろいろ話しかけてくれたので、この湯飲みをあげた。コミュニケーションがよく出来なくて申し訳ないと思った。

空港に着くと、来たときは夜で見えなかったが、あの大地が一望できた。一度モルドバのパノラマをカメラに収め

たかった。しかし時間が無かったのでできなかった。空港にはサワさんが見送りにきていた。サワさんはいつだってミキの最大理解者だと自慢しているところがある。サワさんとライサさんに別れを告げた。あの怖いライサさんが最後にお別れの挨拶のキスをしてくれた。ライサさんはミキの無理難題のスケジュールを全てこなしてくれた。すごい人だ。そうして急ぎ足でモルドバの空港を後にした。

モルドバでの8日間を通して

今回、17年やってきたモルドバ復興支援協会の代表ミキの専属薬剤管理役としてモルドバを訪れた。初めてのモルドバ訪問でミキの行動原理を改めて理解できる良い機会となった。こんなことはきっと最初で最後だろう。

そんなモルドバのことを以下にまとめた。

1. モルドバは貧しい国である。色々日本と比べると、不便であるがみんな普通に暮らしているしすぐに慣れた。道路も横断歩道も舗装されていないし、タクシーだってフロントガラスが割れていても気にしない。埃が多いようで車はみんな泥だらけ…。鼻くそも日本に比べて大きくなりやすい。夜は真っ暗でライトはあまりない。
2. モルドバの魅力はやはり広大な大地であろう。これは日本では絶対見ることができない。当たり一面に広がる大地…。秋になると、文字通り腐るほどブドウがとれる。農業も発展していないのでビニールハウスもない。でもこの大地がいつかモルドバの誇りになると思う。
3. モルドバの問題は大規模な過疎化にある。優秀な人材はサラリーの高い国外にでていく。この国には戻ってこない。大統領すらしばらくいない状態だ。優秀な人材がこの国に戻ってくるようにまずは良い国にしていくことが大事だと思った。
4. モルドバ人はあまり賢いようには見ないが素朴で静かで優しい。のんびりしているが、しかし一生懸命だ。いじらしい国だ。まだまだ発展するには時間がかかるが少しずつ良くなってきている。一生懸命生きているのにモルドバのどこへ行っても日本の大地震の犠牲者のために冥福を祈ってくれた。

午後6時45分、機内に差し込む夕日が切なさを増した。空港で東京の根田さんのためのお土産のワインが2本没収された。ミキが勘違いして入れてしまったのだ。サワさんとタチアナさんがくれたワインだった。カザネスティの校長がくれたハチミツもあったが、これは大丈夫だった。しかし、イスタンブールでこれも没収された。イスタンブールでもお土産を買った。有名なハーゼルババ2つとターキッシュティー1つで30ドル。とても高い、おまけにレジの人が遅くてイライラした。行きはイスタンブールで日本のお茶「伊衛門」を没収された。「日本から容子さんや西川さんのために遥々もってきたのに…」とものがない声で言うミキ…。帰りはイスタンブールでモルドバの思い出が無くなってしまった。

フライトまでは時間がある。現在23:50、日本は5:50。今寝ないと時差ボケになると思ったのでしばらく寝ることにした。寝ながら考えた。モルドバ人はのんびりとしかし一生懸命だ。京都で1人暮らしをしていて寂しくなった時に作った詩がある。

誰も僕のことは心配してくれませんが  
でも健気に生きています  
永治

きっとモルドバ人もこんな感じに生きているんだと思った。

フライトの時、ミキは私に言った。  
「また来てよ」  
また来ようと思った。

**侑霞先生が個展を開催（4月14日から神戸元町で）**

「モルドバドキュメンタリー2011」の表紙絵を描いている侑霞先生が個展を開催する。

## 侑霞 (YUCA) 展 KAWAZU-V

日時：2011年4月14日(木)～19日(火)

Am11:00～pm18:30 (最終日は16:30まで)

場所：OLD BOOKS & GALLERY SHIRASA (シラサ) 2階  
住所：神戸市中央区元町通2-7-5 元町商店街1番街